

---

# ヴェルト デア レーゲンボーゲン

異ノ葉 ~ はみ出し系男子 ~

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ヴェルト デア レーゲンボーゲン

### 【Nコード】

N0924BA

### 【作者名】

異ノ葉 くはみ出し系男子

### 【あらすじ】

リヒト・デア・ヴェルト。世界の光を意味する名を持つ女王は願う。人々の愛を。世界が少しでも良くなるようにと。そして龍丞たちは…？

(前書き)

題名はドイツ語で 七色の世界 という意味です。自分の知っている全てが世界の真理だと信じて周りを拒否していた自分に読ませてもらいたいです…。

何が見えますか？

アナタの立つ其処から…。

視覚的な意味ではなく

何が見えますか？

世界のために犠牲にされる不条理。

1%を犠牲にするだけで救える世界。

安っぽい同情や憐れみ。

答えの出ない問いかけ。

正解の無い問題。

アナタの感じる世界はどんな世界ですか？

アナタの周りにどんな世界がありますか？

アナタの世界は美しいですか？

アナタの周囲の世界は美しいですか？

アナタは世界を

愛せますか？

私は、リヒト・デア・ヴェルト22世。  
消滅した世界の女王。

歴史が消される前に栄えた古代文明。その中で最も強大だった王国の最後の女王でした。女王といっても見た目は18くらいにしか見えないかも知れません。現代でいう魔女と呼ばれていましたから。

私は、世界を愛していました。

人は、今も昔も変わりません。国を護れと剣を振り、人を護れと人を斬る。いつそ剣など世界から消してしまえば。そう思ってみても、剣が無いなら弓を引け、弓矢が無いなら殴り倒せと連鎖は断ち切れませんでした。

それでも…。

それでも私は世界を愛していました。

誰かが愛さなければ…。

誰かが救わなければ…。

憎しみは憎しみのままでしかない。

どこかで断ち切らなければならぬ。

誰かが説かなければならぬ。

だから私は、世界を愛していました。

幾年が過ぎ、髪が真っ白になったにも関わらず外見は18のまま、褐色の肌も18のままだった私は、自分の肉体と精神を乖離させました。そして肉体を森の奥深くにある洞窟のクリスタルの中に保存して世界を見守り続ける事にしました。

私を18の可憐な少女と思い込み、愛してくれた彼には申し訳ありませんでしたが。

私が乖離を完了し、精神が目覚めた時には世界は、別物になっていました。見たこともない服に見たこともない人達。不思議な乗り物に食べたことのない料理。

もしかしたら私の世界とは人の習性も変化しているかも知れないと期待したのですが、残念ながら理由は違えど人の犯す過ちは変わりませんでした。

戦争、迫害、差別、略奪。

武器は殺傷力を増し、私の時代よりも遥かに多くの人を死に至らしめる兵器が世界にひしめいていました。しかもボタン1つで幾千もの死者が出るという、人の死を実感することも無い体制が整っています。

私は悲しくなりました…。

戦争の頻度は確かに減りました。

しかし、現実感が少ないのです。

人が死んでいるという現実感。人を殺しているという現実感が少なすぎるのです。

現場の兵士の事ではありません。

頂点に立つ者の現実感です。

私の時は、王が自ら兵士を率いて戦場の死を体感し、人を大切にすることを学びましたが今はそれがありません。

頂点に立つ者は、統治下にある者の事をつぶさに知っておく必要がありません。でなければ政治などできないのです。収入に応じて予算を組む。そんな当然の事すらできていない国家もたくさんありました。

悲しい限りです…。

しかし、私は世界を見捨てません。

軍を率いたから解ります。

全員が良いことをすれば、必ず世界は良い方向に向かい、全員が悪いことをすれば、必ず世界は悪い方向に向かいます。

ですから、私は諦めません。

私は、人を愛しています。

アナタは今、世界を愛せますか？  
果たして誰が、世界を救えますか？  
一体どうすれば、世界は救えますか？

古に、白の教典と黒の教典がありました。  
しがない寓話ですが、お話しします。

白の教典は言います。

人は、人を愛するべきだと。  
誰にでも愛を持って交わるべきだと。  
されば、憎しみは薄れ消えると。

黒の教典は言います。

人は、人を殺す生き物だと。

生物である限りの欲は消せないのだと。

本能に打ち勝つ事はできないと。

白の教典を信じる者達と黒の教典を信じる者達是对立を深め、やがて黒の教典の使徒達は白の教典をこの世界から完全に消滅させてしまいました。戦いに勝利した黒の教典は戦勝の喜びに浸りましたがやがて悟ります。

相手を否定し憎んだから、戦いになり、殺し合ってしまったのだと。自分達の論じたモノが証明されてしまったのだと。

論が違うだけで、果たして殺し合う必要などあったのだろうか？

信じるものが違うだけで、果たして抹消する必要などあったのだろうか？

黒の教典は大いに後悔しました…。

何を間違えたのでしょうか？

私を愛してくれた彼は愛のあまり、世界を滅ぼして新たなこの世界を創りました。私が死んだと思った彼は世界の全てと引き換えに、私の再生を試みたのです。しかし失敗に終わり、世界は消滅しました。何故か私は消滅せずに新たな世界に残りましたが。

私の愛した世界は消えてしまいました。

だから私は、新たな世界を愛します。

世界はどう見えますか？

あなたは世界を愛せますか？

例え世界に愛されなくても  
あなたは世界を愛せますか？

アナタの世界  
ワタシの世界

みんなの世界は違うけど、空は1つ。  
同じ空の下にいます。

みんな幸せになりたいはずです。  
少しでもいいから人を思いやりましょう。

自己の幸せの為に、他人の幸せを奪うのは止めるのです。そうすれば、他人から少しずつですが幸せを分けてもらえます。

ですからちよつとだけ。

自分の幸せを分けてあげましょう。

それだけで、変わるはずです。

私の肉体は水晶の中で微笑み続けます。

リヒト・デア・ヴェルト。

世界の光を意味する。

この世界に生きる全ての人達へ。  
愛を込めて…。

私はここにいます。  
ずっと見守っています。

人は、人を不幸にするために生まれてくるのではないと信じています。

今、生まれようとしているアナタ…。  
アナタの世界が光で包まれますように。

私は、この世界を巡ることにします。

スレ…。

彼の世界から完全に色が消えかけた…。

その時でした。

目映いばかりの閃光が視界を包み、次の瞬間には彼の前に水晶の翼をはためかせた少女が舞い降りてきました。

髪は短めで肌は褐色、そして、とても優しく、少し憂いを帯びた不思議な微笑みを浮かべています。彼を真っ直ぐに見つめる瞳の色は光と闇を映したかのように灰色でした。その灰色は、光の角度で七色に変わります。

まだ少し、あどけなさの残る輪郭。ですが纏う雰囲気は厳かで、神秘的。おおよそ人ではないような

嶺子。水晶の翼をはためかせてる時点で人ではないと思うんだけど。おおよそ人ではないようになって…。はっはっは！

「ちよっ！なに読んでるの！」

ダメ？

「ダメ。」

なんで？

「なんでも。」

意味わかんない。

「分かって。」

ハイハイ。でもいいじゃんかー。オレの絵の秘密は教えただしちよつとくらい読ませてくれたってさ。ねえ？

「ダメったらダメ。せめて完全に完成したのを読んでよ。添削するんだから。」

ところで先生、お茶いかが？

「ん。もらう。てか先生は龍丞でしょ。」

正解！オレ先生だった。

「どうなの？学校は。」

ん。楽しいよ。やっぱり自分の好きなモノを好きなように描けって教えてる。自分の世界の中に好きなものがあるのってスゲー幸せだからさ。それでいいと思ってる。

「龍丞らしいね。単純。」

悪いかよ？

「褒めてんの！理由考えてこじつけたモノよりも分かりやすくしてシンプルでドストレートで、偽り無いしいいと思う。」

ん…。そう？

「そう。」

ならいいや。

「ねえ龍丞。」

ん？

「私、描いてよ。」

嶺子を描くの？ワタクシ？

「私を描くの！アナタクシが！」

え、えと…。

「なに？描けないの？私の事を描きたくなるほどの衝動が込み上げてこないの？」

……………。カカセテクダサイ。

「棒読みじゃん。ま、もうすぐ誕生日なんだしプレゼントってことで！」

ワタクシ、ヤグサリヨウスケ、ウマレテコノカタ、ニジユウナナネン、ハジメテノシヨウゾウガデアリマス。

「読みにくいから止めなっで！」

ハイ。

「楽しみにしてるから。」

カリカリカリカリカリ

ガラガラ！

「精が出るな。ヤグサセンセ。」

おおー！びっくりした。誰かと思ったたらその肩にかけただけの「ト、メガネの奥の不機嫌な目付き…。沙武郎か…。」

「嶺子ちゃんか…。」

ああ。もうじき誕生日なんだな。プレゼントに描いてくれとねだられたんだ。

「ふ。まあせいぜい頑張るんだな。」

相変わらず、だな。

「オレの生き方、だからな。」

分かってるよ。茶、飲むか？

「ああ。好きでもねえブラックの缶コーヒーにも飽きてきたところだ。」

それも、相変わらず、だな。

「ふふ…。」

ん？なんだ？ズズズ…。うん。美味しい。

「最初は全く合わなかったオレたちがこうして茶を一緒に飲むようになったなんてな。まったく不思議なもんだ。」

最初っから分かり合えるなんて思ってなかったよ。時間かかると覚悟はしてた。

「ああ。出逢えてよかったな。」

まったく…。そしてお互い、結婚相手に出逢えてよかったな。沙武はかなり早かったんじゃないかなかったっけ？

「高校2年だ。」

よくもまあ、ずっといたなあ。

「まあな…。さて。馳走になったな。それじゃあ引き続き頑張れよヤグサセンセ。」

ああ。沙武もな。不良の教育。

ああ。

まったく、面白い世界だよな。

あの頃は、世界を拒否するくらいに大嫌いで真っ暗だったのに。今はこんなに輝いてるんだ。まったく面白いよな。

ニユースを観る限り、世界情勢はあんまり良くない。国内だってそうだ。でもオレ達の世界は、まだまだ元気だぜ。

世界は1つじゃない。

自分の知らない世界はいっぱいある。

そいつを否定しちまったらいけない。  
受け入れられないものもあるだろう。  
受け入れちゃいけないものもな。

世界は面白い。

素晴らしい世界さ。

自分の知るものだけを世界の全てと決めつけて閉じ籠っちゃいけないのわ。

オープンにしよう。

茶にだって色んな種類がある。  
飲んでみて初めて分かるのさ。

意外に、美味いなってさ。

おしまい

(後書き)

繋がってきましたね。無理矢理感がありますけど…。やっぱり龍丞はお気に入り！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0924ba/>

---

ヴェルト デア レーゲンボーゲン

2012年1月2日01時48分発行